

問題解決方法と回復力

—— 赤毛のアンの場合 ——

A Study of Problem-Solving and Resilience:

How Anne Solves her Problems

鬼塚 雅子

ONIZUKA Masako

Abstract

Lucy Maud Montgomery's Anne Series, starting with *Anne of Green Gables* (1908) continues to be the object of numerous scholarly studies particularly because the heroine Anne Shirley is independent, career-conscious and equal to men in her teaching ability. Anne is active in her community, friendly, warm-hearted and curious, which at times leads her to become somewhat meddlesome. This fault can cause difficulties for others and result in Anne getting involved in unexpected incidents, though Anne also meets with misfortune purely by chance. Whatever her predicament, she never runs away from her troubles, instead facing difficult problems head on even while grumbling about them in letters to her future-husband.

As she gains trust and respect from those around her, Anne increasingly receives requests for advice. She demonstrates a surprising ability to help others solve their troubles, even affairs of the heart. Is Anne's success due to luck? Does she possess special gifts that allow her to solve intractable problems? In this paper, I explore how Anne solves personal problems and guides others toward happiness in *Anne of Windy Poplars* (1936). This story is of particular interest because it deals with many social problems, such as child abuse, elderly care, harassment at work and community injustice that remain relevant today. As I examine Anne's decisions and behavior, I also consider the mental states of her and other characters, including changes and growth.

はじめに

『赤毛のアン』(*Anne of Green Gables*, 1908)を第一作とするモンゴメリ(Lucy M. Montgomery (1874-1942))のアンシリーズは誰もが認める古典的名作で、これまでも多くの研究者たちが様々なテーマのもとで取り上げてきた。その理由の一つに、主人公のアン・シャーリー(Anne Shirley)がその作品が発表された時代の女性にしてはかなりの自立心と強いキャリア意識を持ち、社会に出て男性と対等に仕事や地域活動をする魅力的なヒロインであることが考えられる。アンは愛すべき人間だが、欠点も多く、さまざまな問題を引き起こしたり、時には全く予期せぬ災難に見舞われもする。しかし決して現実から逃げることはせず、そのたびに真剣に悩み苦しみながらも、常に前向きに自分に降りかかった問題の対処に取り組む。そのような経験を通して成長するにつれ、アンは周囲の登場人物たちから尊敬と信頼を得て、相談を受ける機会が増えていく。時には周囲の人物や取り巻く自然がアンを解決の道へ導く手助けをする。アンが手がけた数々の問題解決は偶然うまく行ったかのようにみえるが、はたしてそうだったのだろうか。アンはひたすら運がいいのだろうか、アンでなくても同様な結果になったのだろうか。あるいはアンだからうまくいったのだとしたら、その理由は何であろうか。アンの人柄か、知性か、それとも天性の能力あるいはその人生経験から得たスキルなのだろうか。このような疑問を解明するために、本稿では、経験のある教師としてのアンがどのように自分にふりかかる難問を解決したのか、また、周囲の人物たちの抱える問題をどのように解決へ導いたかをシリーズの一作品である『アンと幸福』(*Anne of Windy Poplars*, 1936)を題材に考察する。そのために登場人物たちの会話やアン的心声を中心に分析する。さらに、作品で描かれている現代にも共有する社会問題にも注目する。

1. 世の中の不合理

アンは教員免許取得後、小学校で教鞭をとるが、その後念願かなって大学で学ぶことができた。大学4年間には勉強だけでなく、深い友情をはぐくみ、恋愛も経験する。卒業間際に将来の夫となるギルバート・ブライス(Gilbert Blythe)から求婚され、幸福の絶頂に至る。しかしギルバートが医師をめざすため、結婚は数年先に見送られる。その間、アンはサマーサイド中学校(Summerside High School)の校長(principal)として働いて待つことになる。自宅通勤は難しいため、アンは2人の未亡人と家事全般を取り仕切るレベッカ・デュー(Rebecca Dew)が住

む「ウィンディ・ポプラズ」(Windy Poplars)で下宿生活を送る。新天地でアンが最初に味わう試練は全く身に覚えのない災難だった。それは、サマーサイド地域を牛耳っているプリングル一族(the Pringles)による嫌がらせだった。アンが採用後に知ったことだが、実は一族の一人が校長職を志願していたが、アンの就任により不採用となったという事情があったのだ。子供じみた逆恨みだが、アンが嫌がらせに屈して退職すれば、自分たちの身内が校長に就任できるというのがプリングル一族の狙いであったのだ。第三者にとっては滑稽な出来事だが、当事者のアンには災難とも言える心身共に苦しむ深刻な問題である。しかも大勢いる一族が一致団結するため、次々に謂れのない嫌がらせが彼女を襲う。だが厳しい現実とは違って、こうした問題は物語の中ではやがて解決するだろうことも容易に想像できる。アンの人間性に問題があったり、アンという人間そのものが憎まれているわけではないからである。むしろこの問題の原因が仕事(キャリア)である点に本稿では注目したい。

まず嫌がらせはいかなるものだったのであろうか。プリングル一族は良識と分別を持った人たちである。決して無教養でも下品でもない。したがって、リンド夫人(Mrs. Lynde)の旧友であるブラドック夫人(Mrs. Braddock)の忠告にあるように、「クリームのように口当たりのいいことを言うが、絶えずアンに不利なように物事を持っていく」(“They’ll be as smooth as cream to you but they’ll work against you every time.”¹⁾)やり方で、プリングル一族はアンをじわりじわりと窮地へ追いやっていく。アンはギルバート宛の長い手紙の中で、他の人には言えない嫌がらせの実態を訴える。

“School has been ‘keeping’ for two weeks now and I’ve got things pretty well organized. But . . . the Pringles are my problem. And as yet I don’t see exactly how I’m going to solve it in spite of my lucky clovers. As Mrs. Braddock says, they are as smooth as cream . . . and as slippery.

“The Pringles are a kind of clan who keeps tabs on each other and fight a good bit among themselves but stand shoulder to shoulder in regard to any outsider. (p.17.)

アンは自己反省も込めて、冷静に嫌がらせの分析を行う。単に嫌がらせが嫌だというのではなく、嫌がらせのどういうところが納得できず、不快なのかをギルバートに説明する。これは自分に言い聞かせているのと同じである。そして原因は「不合理」だとアンは冷静に受けとめる。

“. . . The battle is on but is not yet either won or lost. Still, I feel rather unhappy over it all. You can't reason with prejudice. I'm still just as I used to be in my childhood . . . I can't bear to have people not liking me. It isn't pleasant to think that the families of half my pupils hate me. And for no fault of my own. It is the *injustice* that stings me. There go more italics! But a few italics really do relieve your feelings. (p.19.)

アンは決して完璧な人間ではない。しかし子ども時代を他人の中で遠慮と我慢を強いられながら過ごしたアンは人より忍耐強いと思われる。そのアンでも一人で耐え抜くには辛すぎる。そこで、あまりの嫌がらせのひどさに対する口にできない弱音を、手紙の中でギルバートにだけ洗いざらい打ち明ける。表向きは平静さを装いながら、内心はかなりまいっている姿が手紙の中で描かれている。

“The spirit moves me to utter a few yowls regarding the Pringles. I hate to admit it but things are not going any too well in Summerside High. There is no doubt that a cabal has been organized against me.

“For one thing, home work is never done by any of the Pringles or half Pringles. And there is no use in appealing to the parents. They are suave, polite, evasive. I know all the pupils who are not Pringles like me but the Pringle virus of disobedience is undermining the morale of the whole room. (p.24.)

生徒の出来が悪くてもアンのせい、誰かが鼻血を出してもアンのせい、誰も宿題をやらない、そのことを両親に訴えても慇懃無礼に言い逃れされる。学内で最も賢い少女は最大限の軽蔑をこめて「シャーリー先生」と呼ぶだけでなく、リーダーシップをとって組織的な反抗と無礼を繰り返す。プリングル一族全部はアンを食事に一度だけ招待し、その後は完全に無視する。社会的にアンはサマーサイドから閉め出された状態になってしまう。“In regard to the Pringles Anne felt that she was at the end of her tether. More and more the whole situation was coming to seem like a nightmare.” (p.40) とあるような出来事は、小説の中だけでなく、現実でもあり得たことだろう。カナダだけでなく、日本でも同様のことがかつてあったであろうことは容易に推測できる。知り合いも親戚もいない土地で、地域の有力者と意見が異なる場合、若い女性教師は権力との対立を避けられず、だいたいは辞職に追い込まれる。アンの場合も非常に不利な立場に立たされる。教育委員会はプリングル族を支持し、教師に対してあまりに無礼な言動をとったこ

とでアンが登校を禁止した女生徒の復校を許すか、辞職するかの一つを選ぶようにアンに迫らるうことがほぼ確実になってきた。アンはプリングル族とのごたごたを「戦争」(“warfare” p.40)「戦闘」(“fighting” p.41)といった言葉で捉え、最善を尽くしたのに負けに終わりそうなことを悔しく思う。そしてついには自分が悪いのではない、あのような密集軍や策略に打ち勝って誰が成功できるのだろうか (“It’s not my fault,” she thought miserably. “Who could succeed against such a phalanx and such tactics?” p.41) と弱音を漏らす。アンが何よりつらいのは戦いに敗北してグリーン・ゲイブルズに帰ることである。そのようなことになれば、アンは自分に好意を抱いている人たちからは同情されるだろうし、そりが合わない連中(アヴォンリーにいるパイ一族など)は事実を知れば喜ぶだろう。どちらもアンにはやりきれない。その上、教師としての失敗が広まれば、再就職ができなくなることは間違いない。このキャリア上の問題は今もかわらない。学校という狭い世界の中では悪い噂はすぐに広まる。しかも女性の場合は男性よりも浴びる非難が激しく、復活のチャンスは少ない。たとえそれが本人のミスではなく、はめられた失敗でも世間での評価は厳しいものである。

しかしながら、もうこれ以上は我慢の限界で、手の打ちようがないというぎりぎりの難局にまで主人公を苦しめたところで、偶然の出来事がきっかけで一挙に解決してしまうというのがよくあるストーリーの展開方法である。それはアンの場合も同様である。アンがプリングル一族にとって致命的な恥辱の事実を偶然知ってしまったことから、事態は急展開する。プリングル一族はアンに屈して従順になったというより、そうならざるを得ない状況になったのである。この急展開はまさに小説ならではのことで、やや無理を感じるが、すべての問題が消えたわけではないので、読者は納得するとともに、アンのために喜ぶ。

アンが難問を解決するに至ることができたのは、アンがプリングル族からどんなに嫌がらせを受けても、決してそれを誰かのせいにしたり、誰かに八つ当たりしたり、誰かを憎んだりしなかったことが功を成したからだと考えられる。一族の長老的存在の婦人たちの亡き父親の航海日誌を偶然手に入れたときも、アンはそれがプリングル一族にとって誰にも知られたくない不名誉なことだと夢にも思わなかった。むしろ亡き父親のことが書かれた日誌を二人の婦人に渡せば喜ぶのではないかと、いや散々な目にあわされたのでからそこまで親切にすることはないだろうと迷いに迷った挙句、あくまでも好意と優しさからでた行動が結果的にアンを守ったのである。

The Shirley-Pringle feud was over. Nobody outside of the Pringles ever knew why, but Summerside people understood that Miss Shirley, single-handed, had,

in some mysterious way, routed the whole clan, who ate out of her hand from then on. . . . For, although the fatal diary had been committed to the flames by Miss Sarah herself, memory was memory and Miss Shirley had a tale to tell if she chose to tell it. It would never do to have that nose Mrs. Stanton know that Captain Myrom Pringle had been a cannibal! (p.58.)

この結果にアンは手放して喜ぶ。“I feel so happy, Gilbert. I won't have to go home to Green Gables at Christmas, defeated and discredited. Life is good . . . good!” (p.61) と人生の素晴らしさを賛美する気持ちをギルバートにさらけ出す。

こうした事態は、アメリカの心理学者であるクルンボルツ博士 (John D. Krumboltz, 1928-) らがキャリア学会誌で提唱した「計画的偶発性理論」(Planned Happenstance Theory) というキャリア理論があてはまることがあきらかである。

変化の激しい時代になればなるほど、キャリアは自分の思い描いたとおりに実現するものではない。したがって、むしろ現実起きたことを受け止めて、そのなかで自分を磨いていくことのできる力が重要である。さらに、自分のキャリアをひらくためには、自分のほうから何かを仕掛けて予期せぬ出来事をつくりだし、そこで自ら実体験して学習して不要な間をおかず次の手を打っていくということが必要になる²

アンが日頃から磨いていた力とは人を信じる力であり、決してあきらめない回復力(レジリエンス)であると考えられる。常に前向きに生きる姿勢は現代のポジティブ心理学の源と言えるのではないだろうか。

2. 嫉妬と逆恨み

プリングルー族との問題は12月に解決した。つまり就任後わずか4か月ほどで収まったわけだが、同僚の嫌がらせはなかなか終わらなかった。同僚の名はキャサリン・ブルック (Katherine Brooke)、35歳くらいに見えるが、28歳ぐらいで、アンより年上の副校長(the Vice-principal p.28)である。この教師はアンにだけでなく、生徒たちにも刺すような皮肉をぶつけ、相手に不快感、

時には恐怖感を与える。現代のように学校内の教師数が多ければ被害はさほど大きくはないのだろうが、アンの勤める学校は、アンを含めて教師は3人だけである。そのため、キャサリンの理不尽な攻撃はアンに集中して向けられる。キャサリンはプリングルー族との問題があったときも全く助けにならなかった。むしろアンが窮地に陥るのを喜んで傍観していた。アンはキャサリンの人柄と言動について、ギルバート宛の手紙で以下のように分析している。

“Her manner is very repellent . . . , she always has a chip on her shoulder. Every time I pass her on the stairs I feel that she is thinking horrid things about me. Every time I speak to her she makes me feel I’ve said the wrong thing. And yet I’m very sorry for her . . . though I know she would resent my pity furiously. And I can’t do anything to help her because she doesn’t want to be helped. (p.29.)

アンが学校のためになるようなことを提案すれば「おとぎ話には興味ない」(“I’m not interested in fairy tales.” p.29) と嫌味を言い、彼女の仕事と方法をほめると「それでこういう甘いジャムからできている丸薬とは一体どういうものですか」(“And what is to be the pill in all this jam?” p.30) と皮肉を言う。これくらいなら、キャサリン自身が言うようにせいぜいジャムくらいのたわいのない皮肉だが、毎日毎日言われ続ければ、柔らかいジャムもかたくなり、大きな石のような重苦しい物になっていく。

キャサリンのアンに対する風当たりが強いのには、性格の悪さの他に、嫉妬から来る逆恨みがある。キャサリンは自分が校長に昇格すると思っていたが、自分より若いアンがその地位に就任したことを恨んでいるのである。アンに落ち度はなくても、アンが原因となる嫌がらせである。知らず知らずのうちに自分が他人を傷つけたり、恨みを買うのは世の常である。これは現代のどんな職場でも起こり得る問題である。しかし、アンはキャサリンに対して穏やかで好意的な態度をとり続ける。アン自身の優しい性格からであるが、アンにとってキャサリンは反面教師的存在であるからとも考えられる。なぜなら、アンは「本当は、私はキャサリンのように恐怖心で生徒を支配したくはない。自分は生徒たちに好かれたい」(“But I really shouldn’t like to govern by fear as she does. I want my pupils to love me.” p.28) という強い信念を持っているからである。あのプリングルー族に対して揚げ足をとられなかったのも、キャサリンの存在があったからかもしれない。もしキャサリンのようにプリングルー族に対して強気で傲慢な言動をとっていたら、どれほど惨めな結果に終わっていたか、なんとか平静を保って問題解決に臨めたのも、キャ

サリンの反面教師態度がアンにとって防波堤になっていたのかもしれない。

アンはキャサリンにうんざりするほど嫌味を言われ、傷つけられ、友達になろうと努力するのを何度もやめようとする。だがやめなかったのはなぜなのだろうか。アンの穏やかさと気の長さからなのだろうか、単にお人好しだからだろうか、それともたぐいまれな忍耐力によるものだろうか。それはキャサリンの皮肉の鎧の内側に、無愛想な超然とした態度の裏に、人情に飢えている心があることにアンが気づいていたからである。つまり、キャサリンから不愉快な上皮をはげば、内気な不幸せな娘にすぎない、きついうわべの下には恐ろしいほどの寂しさが潜んでいるとアンは鋭く分析している。

“I really would give up trying to be friends with her if I hadn't a queer, unaccountable feeling that under all her bruskeness and aloofness she is actually starved for companionship. (p.30.)

このアンの気持ちは就任2年目になると、さらに強くなる。

“I feel, in spite of everything, that Katherine Brooke is only a shy, unhappy girl under her disagreeable rind. . . . (p.139.)

Katherine Brooke had really been unbearable of late. Again and again Anne, rebuffed, had said, as grimly as Poe's raven, “Nevermore.” Only yesterday Katherine had been positively insulting at a staff meeting. But in an unguarded moment Anne had seen something looking out of the older girl's eyes . . . a passionate, half-frantic something like a caged creature mad with discontent. (p.140.)

アンが勤めて2年目の冬、プリングルー族との確執に追い詰められた時のように、キャサリンの言動にさすがのアンも我慢の限界を越えようとしていたまさにそのときに、アンは秘策をとる。それは環境の変化による問題解決策である。クリスマス休暇にグリーン・ゲイブルズにキャサリンを連れて行くという一大決心をする。

“ . . . I can never make any headway with her in Summerside, but if I can get her to Green Gables I believe it will thaw her out.” (p.139.)

“... I’ve had a feeling for some time that Katherine Brooke is almost crazy with loneliness under her bitter outside and that my invitation will come pat to the psychological moment, Rebecca Dew.” (p.140.)

やや怪しげな心理学的分析を持ち出して、アンは自分の作戦を下宿先のレベッカ・デューに話す。するとレベッカの返事は、「あの冰山とナツメグおろしを合わせたような人間」(“that iceberg and nutmeg grater combined” p.140) はアンの誘いを拒絶するだろうし、万が一受け入れたら、せっかくのアンの休暇がだいなしになるだろうと深く同情する。しかし、天使にも剣突を喰わせるであろう (“She’d go about snubbing the angels,” p.139) キャサリンでも、クリスマス休暇をあばら家のような惨めな下宿でたった一人で過ごすのは耐えられないだろうと判断したアンの考えは正しかった。普段は拒絶するアンの申し出に対して、キャサリンはあっさり承諾する。つまり、ぎりぎり限界の精神状態の時に、タイミングよくアンは救いの手を差し伸べたのである。さすがのキャサリンもその手を払うことはできなかった。加えて、アンの本音も功をなしたのである。アンはキャサリンの質問に率直に答える。

“Why do you ask me? It isn’t because you like me”

“It’s because I can’t bear to think of any human being spending Christmas in a place like *this*,” said Anne candidly. (p.143.)

かざらない本音は偏屈なキャサリンの心に真っ直ぐに入ったようである。このときばかりはキャサリンはアンのさし出す手を取り、環境の変化に身を投じる。その効果は十分にあった。グリーン・ゲイブルズの魔法によって凍り付いていたキャサリンの心が解け、自分の内面をさらけ出したのである。まずは、自分の醜い心を語り、さらには自分の生い立ちを告白し、アンに理解を求める。アンもキャサリン同様孤児であり、他人の厄介になったという生い立ちがキャサリンの心を溶かす。学校ではアン一人で悪戦苦闘していたが、グリーン・ゲイブルズでは美しい自然と善良な人々（マリラ、リンド夫人、ドラ、デイビーなど）の優しい振る舞いが、とげとげしいキャサリンの気持ちを和らげ、固い心の鎧をはずさせる。さらに、中に秘めていた才能を外へ出させて、皆を魅了させる。ここでは、静かな自然が最も強い効果を与えている。

They did not talk or want to talk. It was as if they were afraid to talk for fear of spoiling something beautiful. But Anne had never felt so *near* Katherine

Brooke before. By some magic of its own the winter night had brought them together . . . *almost* together but not quite. (p.148.)

永遠の若さがあり、言葉という粗野なものを必要としない自然という媒介を通し、魂と魂が互いに語り合うことができた。

When they came out to the main road and a sleigh flashed by, bells ringing, laughter tinkling, both girls gave an involuntary sigh. It seemed to both that they were leaving behind a world that had nothing in common with the one to which they were returning . . . a world where time was not . . . which was young with immortal youth . . . where souls communed with each other in some medium that needed nothing so crude as words. (p.148.)

美しい自然と沈黙が魔法のように、キャサリンに心の奥底に溜まっていた本音を吐き出させる。アンに対して、キャサリンが叫ぶあなたには分からないと言う声は、あなたにわかってほしいと訴えているように聞こえる。

“Oh . . . you can’t understand!” gasped Katherine. “Things have always been made easy for *you*. You . . . you seem to live in a little enchanted circle of beauty and romance. ‘I wonder what delightful discovery I’ll make today’ . . . that seems to be your attitude to life, Anne. As for me, I’ve forgotten how to live . . . no, I never knew how. . . . And you . . . you have more happiness than you know what to do with . . . friends everywhere, a lover! . . . but if I died tonight, not one living soul would miss me. How would you like to be absolutely friendless in the world?” (p.149.)

キャサリンは堰を切ったように、自分の心の内をさらけ出す。アンには友達も恋人もいるが、自分には死んでも悲しんでくれる人が一人もいない、自分が持っているものをアンは全部持っている、魅力、友情、そして自分にはなかった青春を持っていると激しく訴える。恐らく自分でも勝手な言い分だと思いながらもアンが憎らしかつたと告白する。キャサリンはこれまで友達を持ったことがなく、友達の作り方も知らないが、なぜかアンには自分のことを分かってほしいと心の底から叫ぶように強く語る。

“ No, I don't hate you any longer . . . I don't know how I feel about you . . . oh, I suppose it's your noted charm beginning to work on me. I only know that I feel I'd like to tell you what my life has been like. I could never have told you if you hadn't told me about your life before you came to Green Gables. I want you to understand what has made me as I am. I don't know why I should want you to understand . . . but I do.” (pp.150-151.)

アンがキャサリンの心の琴線に触れたのは決して偶然ではない。これまでアンが何度もキャサリンに向けてきた優しさが次第に大きくなって、キャサリンの心の扉を押し開けたのである。たった一度の誘いでは、たとえどんなに惨めなクリスマスでも、キャサリンはアンの申し出を受け入れなかっただろう。キャサリンがそれまで取っていた不遜な態度やとげとげしい言葉は、実は彼女の悲痛な叫びを覆うカバーだったことがよくわかる。

本音をさらけ出したキャサリンには弱ささえも感じられるが、自己分析はしっかりできている。キャサリンもまた有能な教師なのである。

“ Oh, Anne . . . hate's got to be a disease with me. I do want to be like other people . . . and I never can now. *That* is what makes me so bitter.” (p.152.)

アン同様、キャサリンも観察力・洞察力が鋭い。キャサリンは自分の偏屈さが、不幸な生い立ち—お互いに憎み合っていた両親に自分が望まれなかったことや、自分を厄介者扱いする親類の元で屈辱的な子ども時代を送ったこと—にあることを素直に認めている。自分がどれほど周囲の人に不快感を与えているかを知りながら、そのような自分を変えられず苦しんでいたのである。これほど辛い自己分析はないだろう。そんな自分の姿を、キャサリンはアンの前でさらけ出すだけでなく、見つめ直すのである。それによってキャサリンはアンの魅力と自分との違いを冷静に把握することができたのだ。下記にあるように、人生の捉え方が二人の大きな違いである。言い換えれば、心の持ち方が二人の人生観の差なのである。

“ To me you seemed one of the favorites of fortune. I've been eating my heart out with envy of you. You got the position I wanted . . . oh, I know you're better qualified than I am, but there it was. You're pretty . . . at least you make people believe you're pretty. *My* earliest recollection is of someone

saying, ‘What an ugly child!’ You come into a room delightfully But I think the real reason I’ve hated you so is that you always seemed to have some secret delight . . . as if every day of life was an adventure. In spite of my hatred there were times when I acknowledged to myself that you might just have come from some far-off star.” (p.150.)

アンは自分の生き方や人生観をキャサリンにぶつける。孤児のアンも善人そのものであるマッシュウとマリラに偶然ひきとられなかったら、キャサリンのようになっていた可能性は十分にある。しかし、それだけではないこともまた確かである。アンの気持ちの持ち方、前向きの姿勢、豊かな想像力などがアンの人生を明るくさせてきた。これこそ回復力の原点ではないだろうか。アンはどうやって前向きに明るく生きるのかをキャサリンに話すと共に、これからの人生への期待感を持たせる。やや甘い砂糖菓子のような感を与えるが、素直な心の読者は感動するに違いない。アンの人生観は甘いようでいて、実は強い生き方だと言える。以下にあるように、アンはキャサリンにこれまでの間違っただけの生き方を指摘し、これからの未来へ向けて具体的な生き方を助言する。

“I am sorry for you. Because you’ve shut out life . . . and now life is shutting you out. Stop, it, Katherine. Open your doors to life . . . and life will come in.” (p.144.)

“You can put hate out of your mind . . . cure yourself of it. Life is only beginning for you now . . . since at last you’re quite free and independent. And you never know what may be around the next bend in the road.” (p.152.)

ここまで言われても、キャサリンはまだ一歩を踏み出せない。アンの考え方に疑問を挟む。アンは人生にはいろいろな曲がり角があり、その先に何があるかわからないのが魅力だと信じているが、キャサリンは自分の道には曲がり角がなく、自分の前には真っ直ぐ地平線まで果てしなく単調にのびている道しかないと主張する。威圧感を持って人に接し、怖れを抱かせいたキャサリンだが、実は彼女自身が人生におびえていたのである。しかし、キャサリンにもようやく変化が見え始める。周囲の人々を「空虚な冷ややかな興味のない人々」(“cold, uninteresting people” p.152)とみていたのが、他の人のようになりたいと言い出す。

“. . . I’ve always felt that underneath all your prickles was something that

would make you worth while as a friend.”

“ I can believe almost anything at this Green Gables of yours. It’s the first place I’ve ever been in that felt like a *home*. I should like to be more like other people . . . if it isn’t too late. . . .” (p.153.)

キャサリンはアンに「自分の仮面をひきはらずして、震えおののく心を見せた (“pulling off my mask and letting you see into my shivering soul” p.153)」とはっきり言う。美しいアヴォンリーの自然の中でキャサリンとアンはそれぞれの思いをぶつけあい、理解を深める。クライマックスはクリスマスのパーティである。生まれて初めて着飾って参加したキャサリンは人々からの賞賛を受け、パーティを心から楽しむ。キャサリンが「私の人生観は変わった。こんな親切な人がいるとは知らなかった」 (“I’ve got a new outlook on life,” . . . “I didn’t know there were people like this.” p.160) という言葉を漏らした時、ようやく彼女の心に明るい人生観が生じたのである。アンはキャサリンの変化は「キャサリン自身の言うに言われない内面的変化によるもの (“some indefinable change in herself.” p.165)」と理解する。

キャサリンの精神面の問題解決はクリスマス休暇でなされたが、生活面での変化はその後の転職でなされた。キャサリンは年度末に中学校の職を辞し、アンの勧めもあってレドモンド大学の秘書科に進学することになった。アンは同僚で友人の将来（キャリア）の方向転換に手を貸したのだ。さらに1年後、キャサリンは世界一周の旅に出る議員の秘書の職に就いたとアンに手紙で知らせる。アンが言うように、その生活はキャサリンに適している。キャサリンは自分のすっかり変わった前途や希望を全部アンのおかげだと感謝する。その潔さがキャサリンが見かけほどひねくれていなかったことを証明している。アン自身は、自分はキャサリンの役にたったことを自負しながらも、最初は容易なことではなかったと振り返り、不快なことはすっかり忘れてしまったとギルバートに打ち明ける。なぜなら、キャサリンはアンを本心で憎んでいたからではなく、抱き続けてきた自分自身の人生への憎しみから起こったことなのだ (“It was just born of her secret bitterness against life.” p.256) とアンは承知しているからである。

アンはキャサリンのキャリア及びメンタルの問題解決の多いに貢献したが、それはまたアン自身のキャリアのスキルアップと人間的成長に加担したと言えるだろう。

3. 児童虐待

この作品を読み返してみると、現代でも大きく問題として取り上げられている子どもに対する身内の虐待が描かれていることに気付き、改めて作品の深さに驚く。ただし、肉体的ではなく精神的虐待である。アンの下宿の近所に住む8歳のエリザベス・グレイソン (Elizabeth Grayson) は、曾祖母である80歳のキャムベル夫人 (Mrs. Campbell) とその召使と一緒に住んでいる。アンがエリザベスから受けた第一印象は「魂の栄養失調の子ども」(“a child who was more or less undernourished . . . not in body, but in soul” p.30) であった。「日光ではなく月光」(“More of a moonbeam than a sunbeam” p.30) とも言っている。少女は「妖精の国の王女」(“a princess of elf-land” p.30) のように美しく上品で礼儀正しく、経済的には恵まれた生活をしているが、孤独な毎日を送り、愛情に飢えている。しつけと称して、曾祖母とその召使は少女に冷たく接し、恐怖感を植え付けている。少女は笑いを知らない。人並み以上に敏感な少女は自分が二人から愛されていないことを十分に感じ取っている。なぜなら、二人はエリザベスのことを名で呼ばず、「あの子」(“the child”) と呼んでいたからだった。「あの子」と呼ばれるのは、エリザベスにとってまるで「犬 (“the dog”）」が、「猫 (“the cat”）」がと言うのと同じように感じられた。しかもそのことで抗議しようものなら、生意気だということで曾祖母に罰せられ、その様子を召使は満足そうに傍観しているのだった。さらにエリザベスはまるで少女時代のアンのように豊かすぎる想像力を持っているため、アン同様、当時の堅苦しい考え方の大人には疎ましい存在に思われている。そのような状況の中、アンとエリザベスは出会い、二人は互いに同類であることをすぐに見抜く。

“There was the touch of the kindred spirit for you. I thrilled to it at once.

.....

“. . . . I felt that I was being weighed in some secret spiritual balance and presently I realized thankfully that I had not been found wanting. For little Elizabeth asked a favor of me (p.31.)

アンは子ども時代、自分は美しい少女で素晴らしい住まいに住んでいると想像することで自分を慰め、孤児故の不幸な境遇を乗り越えてきたが、エリザベスにはその必要はない。だが容貌や生活には恵まれていても、エリザベスの日々には安らぎも愛もない。彼女は説明できない不安な将来を、自分の想像力で美しい「明日」として描き、いつかは二人の老婦人の束縛から逃れて、自

由に息のできる生活ができるのだと信じ、「今」を耐える毎日を送っている。このエリザベスのユニークな考え方には少女時代のアンを思わせるものがある。

“ . . . It *will* come sometime. Some beautiful morning she will just wake up and find it is Tomorrow. Not Today but Tomorrow. And then things will happen . . . wonderful things. She may even have a day to do exactly as she likes in, with nobody watching her . . . though I think Elizabeth feels *that* is too good to happen even in Tomorrow. (p.32.)

アンはサマーサイドにおける自分の使命の一つはエリザベスに笑い方を教えることだと考える。それはすなわちエリザベスの現状における問題解決につながる。そこでアンはエリザベスの曾祖母のキャムベル夫人を説得して、週2回の散歩にエリザベスを連れだすことにする。2年目にはグリーン・ゲイブルズへ2週間連れて行き、3年目には娘のことを放置したままにいる父親に手紙を書く。というのは少女と知り合ってまもなく、アンは、「明日」起こる事柄の一つに少女のところへ生き別れの父親から手紙—これまで一度も手紙を貰ったことがない—が届くことが含まれているのを知ったからである。

2人の堅苦しい老婦人の拘束から逃れて自由に過ごすグリーン・ゲイブルズでの2週間は、エリザベスにとってまるで「明日」がもう来たかのようにだった。少なくとも「明日」の入り口に來ていると実感する。

It was almost as if Tomorrow were already there . . . with fourteen Tomorrows to follow. (p.190.)

Elizabeth knew she hadn't *quite* got into Tomorrow yet, but she knew she was on the very fringes of it. (p.191.)

キャサリンのときもエリザベスのときも、グリーン・ゲイブルズとアヴォンリーの空気の中には魔法のような不思議な力がそこへやって来る人に何らかの影響を与えたように感じられる。さらに、その空気の中で長年過ごした人々にも同様の力が備わっていると思われる。それは優しさと思いやりという力である。愛情と言い換えてもいいだろう。それは人間の基本的な力で、魔法の源ではないだろうか。幸せの未来である「明日」にエリザベスはアンで少しずつ近づいていく。2年目に暗い家を離れてグリーン・ゲイブルズで皆に愛される2週間を送った時には「明日」

の入り口まで来ているを感じとり、3年目に父と知らずに父と会ったとき、「明日」に入っているとエリザベスは言っている。つまりようやく、精神的虐待の生活から脱出して、幸せをつかみかけたのである。その解決へ向かうことができたのはアンのお節介である。

“I’m going to confess something I did last week, Gilbert. I suppose you’ll think I’m meddling again in other folks’ business. But I *had* to do something. I’ll not be in Summerside next year and I can’t bear the thought of leaving little Elizabeth to the mercy of those two unloving old women who are growing bitterer and narrower every year. What kind of a girlhood will she have with them in that gloomy old place?

“This is what I did: *I wrote to her father*. He lives in Paris and I didn’t know his address, but Rebecca Dew had heard and remembered the name of the firm whose branch he runs there, so I took a chance and addressed him in care of it. I wrote as diplomatic a letter as I could, but I told him plainly that he ought to take Elizabeth. I told him how she longs for and dreams about him and that Mrs. Campbell was really too severe and strict with her. Perhaps nothing will come of it, but if I hadn’t written I would be forever haunted by the conviction that I ought to have done it. (pp.230-31.)

迷いに迷った挙句、住所を知ったアンはエリザベスの父親に手紙を書く。物語の流れは順調で、アンの大いなる助力によってエリザベスと父親ピアス・グレイソン (Pierce Grayson) は偶然という形でめぐり会う。父と一緒に暮らすことになり、エリザベスは陰気くさい邸と前世紀に属しているような二人の老婦人からのがれることができた。

“This is Tomorrow,” explained Elizabeth. “I’ve always wanted to get into Tomorrow and now I have.” (p.250.)

“I’ve found Tomorrow,” she said

“And so,” . . . “little Elizabeth’s road of mystery has led on to happiness and the end of her old world.” (p.252.)

エリザベスは日光の差し込まない古い家に象徴される「昨日」の世界から永久に去り、彼女の言う「明日」の国に入っていく。このエリザベスの語る「明日」という考え方は回復力 (レジリエンス) の根本的姿勢ではないだろうか。現実の苦しみを味わいながら、現実から逃避することなく、常に物事が起きるのを待ち受けている。“Things were just bound to happen some time . . .

if not today, then tomorrow.” (p.243) とあるように、いつか何かが起こる、今日起らないなら、明日起きる。決してあきらめない前向きの生き方こそ、現在をたくましく生きる手段である。一見弱々しく見えて、実は一番回復力があるのはエリザベスではないのだろうか。

4. 老人介護

先にとりあげた児童虐待に加えて、老人介護も昔から続いている問題である。その犠牲の多くが女性であることは今もアンの時代も変わっていない。マリラの知り合いの80歳のアドニラム・ギブソン (Mrs. Adoniram Gibson) は車椅子の中で毎日を過ごしている。子どもたちは結婚して家を離れ、自分の家庭には超我儘で偏屈な母親を入れないことにしている。45歳で独身のポーリーン (Pauline) は貧乏くじをひいた運の悪い末娘で、まるで奴隷のように母親に仕えている。その様子は以下の文章がよく説明している。

“... But she can hardly ever get away from the house, even to go to church on Sundays. I (i.e., Anne) can't see any way of escape for her, for old Mrs. Gibson will probably live to be a hundred. And, while she may not have the use of her legs, there is certainly nothing the matter with her tongue. It always fills me with helpless rage to sit there and hear her making poor Pauline the target for her sarcasm. (p.80.)

かなり誇張されすぎていて滑稽なほどだが、我儘な老人介護の悲哀は今も昔も同じと改めて納得する。日本では長男の嫁に押し付ける傾向が強いが、ここでは独身の末娘に兄姉たちがすべておしつけて知らん顔している。身内のエゴイズムがはっきりと描かれている。また、たった一人自分の元に残った末娘が家を出ないように、ギブソン夫人は娘の気弱な性格を悪用している。

“‘If I must die alone I must,’ said Mrs. Gibson. ‘I leave it to your conscience, Pauline.’

“I (i.e., Anne) knew Pauline's battle was lost the moment Mrs. Gibson left it to her conscience. Mrs. Gibson has got her way all her life by leaving things to people's consciences. I've heard that years ago somebody wanted to marry Pauline and Mrs. Gibson prevented it by leaving it to her conscience. (p.81.)

娘の結婚を邪魔してまでも、自分の面倒を見させる母親にはかなり違和感を感じる。第三者より身内の介護を望んだとしても、これは行き過ぎだと思わざるを得ない。それだけではない。ポーリーンは老母の世話だけでも大変なのに、着る物について、靴下一足でさえ母親の許可がないと買うことができない。何もかも着られるだけ着た後で二度も裏返して仕立てなくてならない。同じ帽子を4年もかぶっているという束縛に縛られた毎日を送っている。それでもギブソン夫人が極悪非道な人物に感じられないのは、ややコミカルな物語りの描き方（タッチ）で、親の犠牲者であるポーリーンにとって全くの第三者であるアンが一時的な清涼剤になっていることから、救いが十分あるように思われるからだ。母親であるギブソン夫人がなぜかアンを尊敬している（“her mother ‘thinks quite highly’ of me (i.e., Anne)” p.80）ので、アンがそばにいるときはポーリーンに対しても普段よりあたりがいいと言われ、それ以来アンは週に一度は訪ねている。

「どんなことでもポーリンは嫌な顔をしたためしがありません。優しい、利己主義のない、我慢強い人」（“Yet nothing has ever made Pauline bitter. She is sweet and unselfish and patient” p.80）とポーリーンに深く同情し、彼女を高く評価するアンは、ポーリーンの代わりに母親の面倒を見ることで、彼女が一日を楽しく過ごすという贈り物を与える決心をする。つまりいつもはグリーン・ゲイブルズに帰る週末を犠牲にすることにしたのである。就職1年目の6月頃の出来事である。若い頃、付添娘をつとめた従姉妹の銀婚式の祝いにポーリーンは招かれており、自分の介護を理由に行かせまいとする母親のギブソン夫人に、代わりに面倒をみるから、娘に休みを与えてほしいとアンは申し出る。あれこれ難癖をつけ、文句をいうギブソン夫人をなんとか説得し、ポーリーンは15年ぶりに外へ出かけられることになる。その時のポーリーンのアンに対する賛美は最高のものである。

“ It was just because Ma likes you she let me go. You’ve made me happy . . . you are always making people happy. Why, whenever you come into a room, Miss Shirley, the people in it feel happier.”

“That’s the very nicest compliment I’ve ever had paid me, Pauline.” (p.89.)

こうまで褒められては後には引けない。しかし、実際のところ、その一日はアンが想像する以上にはるかにきついものだった。いつまでも日が暮れないと何度も思ったほど、アンはこれほど長く一日を感じたことはなかった。しかしその苦労は報われた。まるで生き返ったかのように元気になって戻ってきたポーリーンはアンに、まるで天国だった、どうやって恩返しをしたらよいの

かわからない、こんな素晴らしい日は生まれてはじめてだったと心からの感謝を述べる。その直後にポーリーンが口にする言葉に読者ははっとさせられる。

“I wish . . . I wish you didn’t have such a hard time at home, Pauline”
“Oh, dear Miss Shirley, I won’t mind it now,” said Pauline quickly. “After all, poor Ma needs me. And it’s nice to be needed, my dear.”
Yes, it was nice to be needed. (p.101.)

自分が必要とされる人間だと捉えることで、介護が苦しみでなくなる。登場人物の中でも目立たない平凡な一女性の台詞だけに、より重みと深さを感じる。だからと言って、一人だけに介護の苦勞をおしつけてよいことにはならない。アンはシリーズを通して介護の苦勞はしないで済んでいるが、彼女の持つ想像力や他の苦勞から、その苦痛は容易に理解できる。身内から受ける虐待はそのしがらみから簡単には逃れられない。責任感や愛情があればなおさらである。ポーリーンの生活はある意味、精神的虐待であり、小さなエリザベスとよく似ている。生活の苦勞のないところも同じである。だが異なる点は、エリザベスはいつかは今の状況から脱出できると信じているが、ポーリーンは生涯甘んじて受け入れていることにある。なぜなら、少女のエリザベスは自分が大人になれば現状を抜け出せると言う可能性があるが、中年のポーリーンの場合、現状脱出は母親の死を意味するからである。そのような状況にあるポーリーンが愚痴をこぼさず、自分は必要とされる人間なのだと自身に言い聞かせ、母親の介護を続ける姿は現代人にも見習うべきものが多い。

その後、アンが結婚退職でサマーサイドを離れる前に、再度ポーリーンに招待される。その時点ではギブソン夫人はすでに他界しており、アンも読者も安心して次のステージに移れるのである。介護は厳しく辛いのが、終わりがあるのが救いかもしれない。しかしながら、高齢者代表と言えるギブソン夫人のこぼす愚痴にも一理あることを忘れてはならない。

“Ah, when you’ve been old and bed-ridden as long as me you’ll have more sympathy,” whined Mrs. Gibson. (p.86.)

そしてまた、アンの“Nobody is ever too old to dream. And dreams never grow old.” (p.89) という言葉も真実であることは否定できない。

5. さまざまな相談

アンの問題解決は他にも数多くある。教師としては貧しい生徒の学費問題、生徒の才能の開拓や進路指導、一人の女性としては若い男女の恋のキューピッド、孤独な高齢者の話相手など、時には偶然に、時には意識的に手助けをし、解決へ導く。

就任1年目の12月、生徒の一人で孤児のウィルフレッド・ブライス (Wilfred Bryce) が中学を続けられるよう偏屈な伯父ダンカン・ブライス (Duncan Bryce) を説得する。ウィルフレッドは利口な抱負に燃えた少年 (“a clever, ambitious boy” p.52) なので、アンはその将来に日頃から関心を寄せていた。ウィルフレッドはアンコンプレックスである髪の毛を賛美しながら、どんなに恩返しをしていいかわからないと心からの感謝を述べる。

アンがまだプリングルー族ともめていた頃、おとなしく目立たない女生徒ソフィ・シンクレア (Sophy Sinclair) は経済的事情から学内の演劇クラブ (a High School Dramatic Club p.41) に入会できず、上演予定の劇にも出られず、落ち込んでいた。

“I did so want to be in the play . . . to be Queen Mary,” she (i.e., Sophy) sobbed. “I’ve never had a chance . . . father wouldn’t let me join the club because there are dues to pay and every cent counts so much. And of course I haven’t had any experience. . . .” (p.42.)

ソフィの事情を知ったアンは次のように申し出る。

“I’ll write the part out for you, Sophy, and coach you in it. It will be good training for you. And, as we plan to give the play in other places if it goes well here, . . .” (p.42.)

アンの指導のもと、ソフィは人知れず演技の練習をつづける。するとプリングルー族としてアンに嫌がらせをするため、ジェン・プリングルが仮病で主役をおりたため、ソフィが代役で演じることになった。つまり、アンはソフィのキャリアの方向を決定づけるチャンスをつくったのだ。ソフィの演技力は抜群で、舞台上ではメアリ女王になりきっていた。その成果により、ソフィは演劇クラブの終身会員になり—会費はアンが払った—その時からソフィはサマーサイド中学の「重要人物」の一人となったのである (“she was one of the pupils who ‘counted’ in Summerside

High” p.44)。その20年後、ソフィ・シンクレアはアメリカで屈指の女優の一人となる。しかし、その夜、サマーサイドの町の公会堂で幕が下りたときの拍手喝采ほど、ソフィの耳に快くひびいた賞讃はなかったとある。つまり、アンはソフィの才能を見出し、世に出るチャンスを提供したのである。

ルイス・アレン (Lewis Allen) も貧しい生徒だが、中学を卒業後、クイーン高校へ進みたいと思っている。学費のために、普段は下宿で雑用や給仕をし、夏中は農場で働いている。そのような境遇を少しも恥ずかしがらずに頑張っているルイスを、アンは好ましく思うと同時に、身体が丈夫でないことを心配している。アンが就任2年目の初めの頃、そのルイスと一緒に演劇クラブの再編成への寄付集めに週末に街道をまわることにした。ルイスは美しい農家の写真をとってコンテストの賞金をもらい、差し迫って必要な洋服とオーバーを新調するつもりだった。そこで偶然にも出会った親子がルイスの親類ということが後日判明する。ルイスは母の異父兄であるジェームズ・アームストロング (James Armstrong) の申し出により、一緒に暮らすことになり、学費も出して貰えることになる。当然のことながら、アンは二人に感謝される。ルイスとソフィの進路は次のようになる。

“Lewis Allen is going to McGill. Sophy Sinclair is going to Queen’s. Then she means to teach until she has saved up enough money to go to the School of Dramatic Expression in Kingsport. (p.254.)

アンは学生時代から恋のキューピッドとして、時には意図的に、時には無意識に、恋人の間をとりもつことが度々あった。サマーサイド中学に勤務している3年間の間にも何組かの縁結びを行った。

1年目の2月、招待されたサイラス・テイラー (Cyrus Taylor) 家の晩餐会 (夕食) の席でアンが重苦しい沈黙を破る奇抜な発言が発端となって思わぬ展開となり、2組のカップルが誕生する結果となった。特にレノックス・カーター博士 (Dr. Lennox Carter) とイズメ・テイラー (Esme Taylor) の婚約発表はアンのおかげと思われている。自分も手を貸したことにはなるかもしれない (“perhaps I did take a hand,” p.74) とアンは口では謙遜しながら、自信ありげにギルバートに報告している。

春になり、アンはネルソン家 (The Nelsons) の結婚式の前日の晩餐会に呼ばれて出かけた。そこで意地の悪いグレース叔母から「行き遅れ」 (“an old maid” p.103) と言われたネルソン家

の娘ノラ (Nora) とジム・ウィルコックス (Jim Wilcox) はもともと恋人同士だった。その二人のこじれてしまった仲をアンが偶然にも取り持つ。一夜明けてアンがノラを見ると、まるで別人のようで、幸福のあまり顔を紅潮させ、10年は若返っていた。“I owe this to you, Anne. If you hadn't set the light” (p.117) とノラはアンに感謝し、一件落着となった。

2年目にはヘイゼル・マー (Hazel Marr) とテリイ・ガーランド (Terry Garland) を結びつけた。ヘイゼルは青年たちに人気がある18歳の娘で、彼女に頼まれてテリイにヘイゼルの気持ちを話しに行く。するとどういふわけか彼はアンに夢中になり、ヘイゼルはアンが誘惑したと思いき、激怒する。最後には2人はアンを誤解したまうまくいく。

3年目には1年以上も婚約していながら、それ以上少しも進展のないジャービス・モロー (Jarvis Morrow) と19歳のドビー・ウェストコット (Dovie Westcott、本名シビル Sibyl) が駆け落ち (elopements) するのをアンは助け、結婚に反対していたドビーの父親フランクリン (Franklin Westcott) をなだめることを二人に頼まれる。実際は、フランクリンは二人の結婚に表向きは反対しながら、内心は以前から賛成であり、二人の仲がなかなか進展しないことにやきもきしていたのだった。その事情をアンだけが明かされ、すべてはうまくいった。アン・シリーズに恋の話は多い。アンは恋愛のドタバタ騒ぎに巻き込まれたり、使命感に燃えて自ら飛び込んで行く。そうした出来事は物語のアクセントになっている。

この作品の中でなかなか興味深いエピソードは、あれほどお喋りのアンがしゃべり負かされるユニークなキャラクターの登場である。3年目のある晩、アンはサマーサイドでは名門であるミネルバ・トムギャロン (Miss Minerva Tomgallon) にディナーに招待される。彼女の亡父の貴重な蔵書をアンが勤務する学校に寄贈したことが縁でアンと知り合い、アンは不思議に彼女に気に入られる。その一族は「昔は王族だった (“they were the ‘Royal Family’ in old days” p.229)」という。一族の特徴は話好きで、「アンをしゃべり殺さなければいいが (“Well, I hope she won't talk you to death, Miss Shirley. The Tomgallons could all talk the hind leg off a cat.” p.230)」とレベッカが心配するほどよくしゃべる。120年もたった古い邸の中で、ミネルバ嬢は一方的に話をし、お喋りなアンがほとんど口出しできず、傾聴に徹していた。それがミネルバ嬢にとっては楽しい会話なのだろう。聞いてくれたアンに対して満足し、褒めちぎる。それは彼女にとって自分へのささやかな誕生日祝いだったのだ。

“I've enjoyed having you so much, my dear,” said Miss Minerva when Anne left after breakfast. “We've had a real cheerful visit, haven't we? Though I've

lived so long alone I've almost forgotten how to talk. And I need not say what a delight it is to meet a really charming and unspoiled young girl in this frivolous age. I didn't tell you yesterday but it was my birthday, and it was very pleasant to have a bit of youth in the house. There is nobody to remember my birthday now . . ." Miss Minerva gave a faint sigh . . . "and once there were so many." (pp.241-42.)

このミネルバ・トムギャロン嬢の言葉は、前述のギブソン夫人同様、胸に響く。老人の戯言や我儘ではなく、寂しい孤独な年配者の心の声と捉えるべきだろう。

小さなエリザベスは明日に憧れ、明日のことばかり話しているが、ミネルバ・トムギャロンはアンの言葉を借りれば、昨日のことばかり口にする。つまりミネルバ嬢がどんなに名門で、威厳のある姿をしていても、「昨日」の中に生きているに過ぎない。それはギブソン夫人やエリザベスの曾祖母と同じである。ミネルバ嬢の話はすべて過去の一族の悲劇であり、不思議なことにミネルバ嬢にとって自慢話なのである。

アン自身、ギルバートに次のように言っている。

"I thought Tomgallon House was a sleepy old place where nothing ever happened. Well, perhaps things don't happen now but evidently they *did*. Little Elizabeth is always talking of Tomorrow. But the old Tomgallon house is Yesterday. I'm glad I don't live in Yesterday . . . that Tomorrow is still a friend. (p.242.)

アンもまた「明日」に向って生きているのである。

おわりに

生徒の一人ルイスと寄付集めに歩き回りながら、アンは人生と道の曲がり角について口にする。

"Isn't a road an interesting thing, Lewis?" said Anne dreamily. "Not a straight road, but one with ends and kinks around which anything of beauty and surprise may be lurking. I've always loved bends in roads." (p.126.)

「曲がり角」という言葉がアン・シリーズの中で最初に出て来るのは、第一作である『赤毛のアン』(*Anne of Green Gables*) の第38章 “The Bend in the Road” である。アンは様々な事情から進学を断念した直後、マリラに曲がり角の魅力を力強く述べている。

“ When I left Queen’s my future seemed to stretch out before me like a straight road. I thought I could see along it for many a milestone. Now there is a bend in it. I don’t know what lies around the bend, but I’m going to believe that the best does. It has a fascination of its own, that bend, Marilla. I wonder how the road beyond it goes — what there is of green glory and soft, checkered light and shadows — what new landscapes — what new beauties — what curves and hills and valleys further on.”³

そしてアンは独身時代に最後に書くギルバートへの手紙でも「曲がり角」という表現を用いている。

“I’ve come to another bend in the road. I’ve written you a good many letters in this old tower room these past three years. I suppose this is the last one I will write you for a long, long time. (p.253.)

その手紙の中で、アンはサマーサイドで過ごした3年間を振り返り、これから送るギルバートとの結婚生活に期待と喜びを隠さずに書いている。アンは人生に対して常に明るく前向きである。落ち込んでも回復が早い。M. チクセントミハイによれば我々が自分自身や生活から得る喜びをどのように感じるかは、心が日々の経験をどのように濾過し、解釈するかに左右され、我々が幸福であるかどうかは内面の調和による⁴という。

アンのような人物を分析していると思われる文章をとりあげてみよう。

生き生きとした生活を送るこのような人々は多様な経験に対して自分の心を開いており、死を迎えるその日まで学び続け、他者は自分の生活環境と強い結びつきをもち、それらに自分を委ねている。彼らは退屈なこと困難なことですら、自分のしていることすべてを楽しみ、退屈することはほとんどなく、彼らの行く手に現れるどのような困難をも平然と乗り越えていく。おそらく彼らを支える最大の力は、自

分の生活を統制しているということである。⁵

ポジティブ思考のアンのような人間は「ささやかではあれ自分の周囲にいる人々をも幸福にする方法を身につけた人である」⁶。この心理学の分析は、前述のポーリーンがアンに向って臆することなく賛美する「あなたはいつも人を幸せにする方ですね、あなたが部屋へ入ってくるといつでも、そこにいる人たちは一層幸せな気持ちになります」という表現と一致する。現代において新しい心理学とも言えるポジティブ心理学に通じる要素を持つアンを描くモンゴメリの作品は、最も新しい小説であると言えよう。

《注》

- 1 L. M. Montgomery, *Anne of Windy Poplars* (New York : Bantam Books, 1998) p.6. 以後、この作品からの引用はページ数を文中に記す。
- 2 佐々木直彦『キャリアの教科書』（東京：PHP 研究所、2004）pp.96-97.
- 3 L. M. Montgomery, *Anne of Green Gables* (London : Puffin Books, 1977) p.303.
- 4 M. チクセントミハイ著、今村浩明訳『フロー体験 喜びの現象学』（世界思想社、2013）p.12.
- 5 Ibid., p.13.
- 6 Ibid.

《参考文献》

L. M. Montgomery, *Anne of Windy Poplars*, New York : Bantam Books, 1998

L. M. Montgomery, *Anne of Green Gables*, London : Puffin Books, 1977

佐々木直彦『キャリアの教科書』PHP 研究所、2004

マーティン・セリグマン著、宇野カオリ監訳『ポジティブ心理学の挑戦』株式会社ディスカヴァー・トゥエンティワン、2014

マーティン・セリグマン著、山村宜子訳『オプティミストはなぜ成功するか』フェニックスシリーズ⑦ パンローリング株式会社、2014

M. チクセントミハイ著、今村浩明訳『フロー体験 喜びの現象学』世界思想社、2013